
魔法少女リリカルなのはStrikerS 紅い刃を持つ男

カンパチ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはStrikers 紅い刃を持つ男

【Nコード】

N2060BA

【作者名】

カンパチ

【あらすじ】

機動六課になのは、フエイト、はやての知るある男がやってくる。その男が来たことで始まる物語。

プロローグ(改)(前書き)

はじめまして、カンパチです。

初投稿なんで暖かい目で読んで下さい。かなりのグダグダなので「
注意を。」

プロローグ(改)

【魔法少女リリカルなのはStrikerS 紅い刃を持つ男】
プロローグ

???side

新暦75年3月

地上本部特務一課部隊長室

「は????今、何とおっしゃいましたか？」

「えーと。シュタインブルグ三佐を4月から機動六課へ出向とします。」

「つまり、特務課から新設の機動六課へと左遷ですか？クラン少将。」

「俺事、アウル・シュタインブルグは今クラン少将より通達を受けた。(しかし、何か変なことでもしたか？左遷なんて有り得ねえ。)

そう思っていると

「やだ、あんたみたいな優秀な手駒を簡単に手放す訳ないでしょ。」

「なら、何故。まさか、またゴマすったんですね？」「ギクッ!？」
(.....この女狐ね。まあ、いつものことだが。)

「ハア。・・・もういいです。でも、理由ぐらい聞いても宜しいですか？」

「エー。めんど」殺しますよ。(チャキ)「ハイッ。話すからロー
エングリンを出さないで」(泣)。「」

(つつたく。さつさと話せばいいのに。)

「実は、機動六課の後援が教会でね。あのオッサンが反対してね。」

「かなり説明不足ですが、監視役ですか？」

「大正解!!! これでどちらにも貸しをつくれたからハッピーよね
!。あと、君にとってはこの話で損はしないと思うけどな。」

(.....は?)

side out

なのはside

今、わたしとフェイトちゃんとはやてちゃんは、スバルとティアナ
への機動六課への勧誘を終えて解散するはずだったんだけど.....
.....

「なのはちゃん、フェイトちゃん。耳に入れといてほしい話がある
んやけど。」

「どうしたの?はやてちゃん。急に話したなんて。」

「実は、機動六課に新しく出向になった人がいるんよ。特務課から

の人やねんけどな。特務一課のクラン少将直々の推薦なんやて。」

「「えッ!?!?」」

「どうして、そんなところから。」

フェイトちゃんの言う通り、エリート部隊の特務課から、しかもあのクラン少将の推薦だなんて。でも、それだけじゃないみたい。

「そんな事よりも大事なことがあねん。出向してくる人物や。」

「その人がどうしたの?」

(特務隊ってところより大事なところって。アレ?はやてちゃんなんだか嬉しそう?)

「ふっふっふ。実はうちら皆知ってる人やで。」

(えーと。わたし達が知っていて、はやてちゃんが嬉しくなるほどの人って。。。)

「まさかっ!?!」

「そう、そのまさかや。」

「「アウル(くん)っ!?!?」」

(嘘。アウルくんが機動六課に。)

わたしはアウルくと久しぶりに会えることに嬉しさを感じた。

「久々にみんな揃うんだね。アウルどれだけ成長したんだろ。」
（フェイトちゃん。なんだか親の心境になってるけど、一個下だよアウルくん。でも、楽しみだなあ。）

そんな事を思いながら、みんなで今後のことについて話し合った。

s i d e o u t

ブローグ（改）（後書き）

エー。かなりグダグダでした。
これから、少しずつ修正していきたいと思えます。

今回は、機動六課始動編です。

第1話（前書き）

やってみました、連続投稿！！？

さすがに疲れますね。しかも、全く進んでない。かなりのグダグダ
具合ですが楽しんでいただけたら嬉しいです。

では、第1話です。

どうぞ。

第1話

【魔法少女リリカルなのはStrikerS 紅い刃を持つ男】

第1話

アウルside

「ここか、機動六課ってのは。地上本部からかなり遠いな。なあ、ローエン格林。」

地上本部から40分以上かかるなんて。めんどくせえ。

「そうだな。しかし、お前と話している暇はなさそうだ。」

デバイスであるローエン格林がそう呟く。

「どついうことだ？」

「クラン少将からのデータによるともう少して式が始まるようだ。」

「おっとー！いけね。なら、早く部隊長に挨拶しにいかねえとな。」

「ああ。」

機動六課の隊舎に入ると、ロビーの方でちらほら人が集まっているがまだ少ないようだ。部隊長室の場所が分からないので、近くにいたオレンジ色の髪をした少女に話し掛けてみる。

「すまない。少しいいだろうか。」

「はい。何でしょうか。」

「自分は、今日からここに配属となったアウル・シユタイムブルグ三等特佐だ。部隊長室の場所が分からないので案内できる者はいないか？」

「!？ 特務隊!! しっ、失礼しました。自分はティアナ・ランスター二等陸士でありますっ。」

（まあ、機動課に特務課の人間が来る事が少ないからな驚きもするか。）

とか思いながら話しを続けることにする。

「そんな力まなくてもいい、ランスター二士。それで、場所が分かる者はいないか？」

「なら、自分をご案内させていただきます。」

「ああ、よろしく頼む。」

「はいつ!?!」

「こちらになります。」

「ああ、すなまなかつたな。ありがとう。」

「いえ。では、失礼します。」

そういつて、ランスター二士と別れて、部隊長室の前までいく。

(そういえば、部隊長の名前って知らないな。クランさんが「会えばわかる!」なんて言ってたが誰だ?)

そう思っているとドアの前まで来てしまった。

(いけね。切り替えねえと相手さんに失礼だ。)

気持ちを切り替えて、呼出しのボタンを押す。

「は〜い。入ってええよ。」

(ん?なんだ?)

この独特な話し方に聞き覚えを感じつつもドアをスライドさせ挨拶をする。

「失礼しま……。」「中に入って自分は思考が停止してしまつた。その理由だと。中にいた人物が俺のよく知る奴らだったからだ。」

「くくく久しぶり(だね)(やな)、アウル(くん)。」「」

「……………失礼しました。」

「……ええーっ！？ちよつと待って（ちーや）！……どっして出ていくの（んや）！？」「」

（いやいや、すごいハモリだな。）
とツッコミを心の中に留めておく。

「何か違うことを考えておるだろう。それよりもはやく挨拶しないか。」

ローエングリンに諭され落ち着く俺。何か悲しい。

「すまない。この部隊にお前達がいるなんて知らなかったからな。つい、驚いたただけだ。久しぶりだな、なのは、フエイト、はやて。これからよろしくな。」

「……うんっつ！……」「」

（だからハモるなよ。）

別のところにツッコミをいれつつ、久々の再会を喜んだ。

sideout

人物・デバイス設定＋用語解説（ネタバレ注意）（前書き）

今後の話しの構想が浮かばないので、先に投稿します。

人物・デバイス設定＋用語解説（ネタバレ注意）

？「人物設定」

アウル・シュタインブルグ

面倒臭さがりな主人公

年齢：18歳

性別：男

身長：174？

髪型：セミロングの茶髪

顔：バランスの取れた中性的な顔立ち

出身世界：？？？

所属：特務一課戦闘部隊長 機動六課FW部隊コールナンバーロン
グアーチ05

階級：三等特佐（他の三佐とあまり変わらず）

術式：近代ベルカ式主体

（ミッド式も一応使えるが滅多に使わない）

魔力ランク：S（リミッター時AA）

魔導師ランク：S -

魔力光：青

デバイス：ローエンゲリン

好きなもの：麺類、デバイス研究、旅行、友人、家族

嫌いなもの：辛いもの、デスクワーク（苦手ではなくただ面倒なだけ）、人を見下す人

3年前に設立された特務一課の戦闘部隊長に入隊から約1年で上り詰めた男。

二つ名で「マグダナの紅い刃」と呼ばれている。

彼の戦術スタイルによって、ミッド式主流だった風潮からベルカ式を再検討する動きがでるほど。

しかし、私生活となると極普通の生活しかしない（何かするのが億劫なだけ）。なのは達とは、6年前の任務で知り合ってから付き合い合い。

管理局入局以前の経歴が不明であり、それを知っているのはクランのみ。

クラン・セアトニック

年齢：25歳

性別：女

身長：156？

髪型：黒のロング

顔：生粋の日本人に見える。しかも、かなりの美人。

出身世界：第1管理世界

“ミッドチルダ”首都クラナガン

所属：特務一課部長

階級：少将

術式：ミッド式

魔力ランク：A A

魔導師ランク：A A +

魔力光：深緑

デバイス：特務隊制式採用銃型デバイス N173

管理局内でもかなりの権限を持つ特務隊総司令官。

3年前に特務隊を立ち上げた張本人。管理局屈指の戦略家であり、管理局の腐敗を憂いその優れた知略を使い管理局を変えようとしている。

ちよつとお茶目なお姉さんでアウルをいじるのが愉しみ(?)の1つ。だが、よくアウルにOHANASIを受けているらしい。
アウルの過去を知る唯一の人。

「デバイス設定」

ローエンゲリン

管制人格：男 オッサン

アウルが独自に造りあげた両刃剣型のアームド型インテリジェントデバイス。

通常時の色は灰色だが、剣の内部に魔力流し込み、高速震動させることによつて赤く発光し、AMF環境下でもカジェットをいとも簡単に切り裂く事が可能。

更に、剣内部で魔力を圧縮して刃にある隙間から魔力刃を打ち出す事も可能。

完成してから10年も経っていないのにかなりオッサンみたいに達観している。更に、マスターのアウルに人生論を語ったりする。

アウル曰く、そんなデータを組み込んだことはないという。

N173

特務隊制式採用銃型ストレージデバイス。

簡易AIを搭載している。

3つのモードを使用可能。

・アサルトモード

連射性能を追求したモードで、牽制用として主に使用される。

ただし、一発の威力が低いうえに誘導性能が全くない為にこのモードのみで戦闘は難しい。

・ショットモード

面制圧を目的としたモードで、銃口から20発の小型魔力弾を一斉に発射して相手にダメージを与える。

カートリッジをロードすれば、ガジェット?型でも一撃で破壊可能。

・スナイパーモード

狙撃を目的としたモードで、支援能力に優れている。このモードは、連射が可能なのが特徴。射程は500メートル。

? 「用語解説」

特務隊

5年前に起こったクーデター未遂事件“マグダナ事件”を背景に3年前、管理世界でのテロや広次元犯罪の取り締まり組織として、克蘭・セアトニック(当時、一等空佐)が中心となって設立される。独立行動権や単独調査権、予算請求権、人員徴収権の一部が認められており、かなりの権限を持つ。

現在、まだ一課しか稼動しておらず人手不足が深刻。

人員は現在80名(戦闘員はうち24名)。

マグダナ事件

5年前に第51管理世界の主星“マグダナ”で発生したクーデター未遂事件。

クーデター側として、次元航行艦2隻と魔導師107名が参加。鎮圧側として、次元航行艦2隻と魔導師56名が参加。

管理局設立以降初の艦隊戦となる。

この事件で、アウル・シユタイムブルグ(当時、空曹)は次元航行艦一隻航行不能、魔導師29名撃墜という華々しい戦果をあげ、二階級特進を果たし、「マグダナの紅い刃」と呼ばれる様になる。

第2話（前書き）

頑張って、書いてみましたが、中途半端になってしまいました。

第2話ですじじいぞ。

第2話

アウルside

あれから、感動の再会に浸ることはできず。すぐ後にやって来たグリフィス准尉の催促によって隊舎のロビーで機動六課の稼動式に、はやての右隣りに並んでいる。

しかし、この部隊は女性が多くないか？戦闘員なんて俺と赤髪の少年しかいねえし、しかも10歳前後とみた。

(……………はあ。)

上手くやってけるかねえ、俺。自信ねー。

『何をそんなにしよげておるのだ？』

ローエングリンが念話で話し掛けてくる。

『だってよお……。ここの部隊、女性率高すぎだぜ。一面倒臭さそうだ。』

『馬鹿者。人脈の狭い八神がここまでの部隊をつくるといったら知り合いに頼むしかないだろう。』

『分かってるわそんなことぐらい。けどよお。』

『諦めて慣れるんだな。』

(こいつ、何でこんなに達観してるんだ?)

などと考えていると、はやてが俺の名前を呼ぶ。

「ほな、うちの役目は終らせたさかい。アウル、自己紹介しいや。」

「いきなり何言い出すんですか、八神部隊長。」

「ええやないか別に。この部隊のなかでアウルだけはみ出しもんみたいやからなあ。今のうちに顔覚えてもら「辞退いたしま」命令や。

「・・・了解。」「・・・よしっ!」

チクシヨー。新手的嫌がらせか?

『そんな訳ないやろ。』

『何故、心が読めるっ!』

『そんなんどおでもええから、はよしいっつ!』

(いやいや、良くないよ!?俺にとっては死活問題ですよ!はやてさん!?)

などと考えていたが、隊員の皆さんの視線にたえられず、渋々挨拶を始める。

「えー。皆、初めて会う者が多いと思う。自分は、アウル・シユタインブルグ三等特佐だ。本日より、特務一課からこの機動六課へと出向となった。この部隊では、八神部隊長の補佐や高町教導官の補佐って、補佐が多いがよろしく頼む。」

(フーツ。何とかそれらしくなったぜ。)

「何や、案外まともやな。」

「一応、これでも指揮官だったもので。」

などと、はやてと言いつつ合っていたが、いきなり前から声があがる。

「ア・・アウル・シユタイムブルグ!!? “マグダナの紅い刃”!
!! どうして、こんなところにつ!!?」

ん?何で、その名前しってるんだ?特務隊では、そんなにいわれないから知らないと思っただが冷静に対処することにした。

「ああ、私はその名で呼ばれているが、その名前は苦手でなあまり呼ばないでくれないだろうか?」

「はっ、はいつつ!!!」

うん。そんなに有名なのか?俺。

『なあ、なのは。』

『ニヤッ!!! な、何かな?アウルくん。』

『俺ってそんなに有名なのか?あまり他の部隊に足を運ばないからな。わからないんだ。』

『うんっ!凄いや有名だよ!!テレビや雑誌でよく取り上げられてる

よ。知らないの?』

『いや、知らないんですけど……っっ!!まさかっ!!』

『どっしたの?』

『何でもない。ありがとな、なのは。』

『?? ううん。別にいいよ。』

(あのヤロウ……黙ってやりやがったな。)

「ほな、アウルの紹介も終わったからこれで解散な。」

俺がある女性に怒りを感じているうちに、はやてが話しをしめていた。

「で、これから新人達と顔合わせするわけだが。どんな奴らなんだ?なのは。」

「凄いいい子達だよ。育てがいがって、とても楽しみだよ!？」

「……………」

「どうしたの?急に黙っちゃって。」

「……………余り無茶はするなよ。」

「へ?」

「だからっっ!?!無茶はしないでくれって言ってんだ!……………
久しぶりに会ってすぐに倒れられたら面倒臭さいからな。」

「……………ふふっ。」

「何だよ。」

「ん〜。素直じゃないね、アウルくん。」

「……………何じゃそりゃ。」

「ふふっ。あっ、あの子達だよFWのメンバー。」

気まずい雰囲気(俺的に)の中、なのはが指差した方をみる。確かに4人の少年少女達がいた。
なのはがその子達に呼びかける。

「みんな揃ってるかな？」

「……はいつ……!」「……」

「おっ！ いい返事だ。一応挨拶するぞ。俺はアウル・シユタインブルグ、階級は三等特佐だ。気軽にアウルと呼んでくれ。階級なども付けなくていいぞ。」

「スバル・ナカジマ二等陸士です。」

「ティアナ・ランスター二等陸士です。」

「エリオ・モンディアル三等陸士です。」

「キャロ・ル・ルシエ三等陸士と相棒のフリードです。」

「キユクー。」

「スバルとティアナとエリオとキャロとフリードだな。これから一年よろしく頼むな。」

「……よろしく願いますっ……!」「……」

『確かにいい子達だな、なのは。』

『んふふー。そうでしょ。』

そんなことをなのはと念話しながら皆で訓練場に歩いていった。

FWメンバーは、訓練着に着替えに行っただんで、なのはと訓練場に
来ていた。すると、俺達が来た方とは反対側から一人の女性が走っ
てくる。

「なのはさーん！」

「シャーリー！」

なのはの知り合いの様だなと思っていたら、FWメンバーもやって
来た。

「ちょうどよかった。シャーリー、挨拶お願い。」

「はい。シャリオ・フィーノー等陸士です。気軽にシャーリーって
呼んでね。私はメカニック担当なので、皆さんの訓練の様子も見さ
せてもらっからよろしくね。後、デバイスについて聞きたいことが
あったら何でも聞いてね。」

「「「「はいつ！」「」「」

「アウル・シュタインブルグだ。アウルと呼んでくれて構わない。」

「分かりました、アウルさん。」

「えーと。今返したデバイスには、訓練用のデータチップが入っているから、いつもより大事に扱ってね。」

「くくくはいつ！」「くくく」

「さーて、じゃあ早速訓練始めよっか。」

「あ、あの一。ここですか？」

「何もありませんよ。」

「確かにないもないな。こんな所でどうやって訓練するんだ？すると、なのはが。」

「シャーリー。」

「はい！ステージセット。」

シャーリーが電子端末のボタンを押すと、何も無い所からいきなり都市が出て来た。

「すごーい！ー！」

「スバル、うっさい！ー！」

スバルがはしゃいで、ティアナは止めてるが、内心驚いてるみたいだ。

(スゲーなこりゃ・・・。こんな所に金使うのかはやてのやつ。)
自分も内心驚きつつもそれを外には出さない。指揮官になってから
のくせだ。

「しかし、空間シュミレーターとはやるな。」

「そうですね。この部隊の唯一の見所だってはやてちゃんが言っ
たよ。」

(はやてよ他に見所はつくれなかったのか?)
そう心の中で呟きつつも訓練を開始した。

「みんな、準備はいいかな？」

「」「」「はいつ!」「」「」

「うん、いい返事。じゃあ、シャーリーお願い。」

「動作レベルC、攻撃精度Dってどこですかね？」

「そうだね。まずは軽く8体から。」

「まあ、それぐらいなら大丈夫だろう。」

シャーリーが端末を操作してターゲットを出す。その間になのはが
解説と。

ガジェット・ドローン。自立行動型の魔導機械で、このタイプは近づいてきたら攻撃するやつだ。

（さて、皆さんの实力を見せてもらおうとしますかね。）

そう思いながら、彼女達の姿を眺めていた。

s i d e o u t

第2話（後書き）

次で、初日を終わらせたいなとない頭でひねっています。

次回も頑張りますので、是非読んでください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2060ba/>

魔法少女リリカルなのはStrikerS 紅い刃を持つ男

2012年1月7日00時49分発行